

[論文]

ソーシャルワーク専門職養成における現場との協働による 教育効果の検証—地域人材の養成・育成に向けて—

Examining the Educational Effects of Collaboration with Practice Settings in the Training of Professional Social Workers: Toward the Development of Community Human Resources

宮崎 まさ江¹⁾

MIYAZAKI Masae

内田 充範²⁾

UCHIDA Mitsunori

要旨

筆者らは、2017（平成29）年度より「認知症の人と家族の会山口県支部」が主催する認知症カフェ等の学外活動に、学生とともに参加してきた。こうした現場体験型学習は、学生の学びの視野を広げ、関心や探究心、主体性を育むなどの大きな教育効果が得られ、キャリア形成にも寄与するものと実感している。

本研究では、学外活動の一つである認知症カフェへの参加を繰り返すことを目的に、現場のスタッフの協力を得てグループインタビューを実施し、地域人材の養成・育成の観点から現場体験型学習がもたらす教育効果を検証した。その結果、学生は、認知症のある本人や家族、スタッフ等関係者、地域住民との直接的なかかわりを通して、ソーシャルワーク専門職に必要な知識や技術を体験的に理解していた。現場のスタッフによる活動支援や教員による事前・事後の学習支援が体験型学習を支持し、学びを促進していることがわかった。このことから、現場体験型学習は、地域で社会的役割を担う人材の養成・育成において教育効果があることが示され、今後は現場との協働による活動・学習支援体制の一層の強化が求められる。

キーワード：現場体験型学習、認知症カフェ、ふり返り、ライブスーパービジョン、ソーシャルワーク専門職および地域人材の養成・育成

1) 山口県立大学 社会福祉学部 社会福祉学科

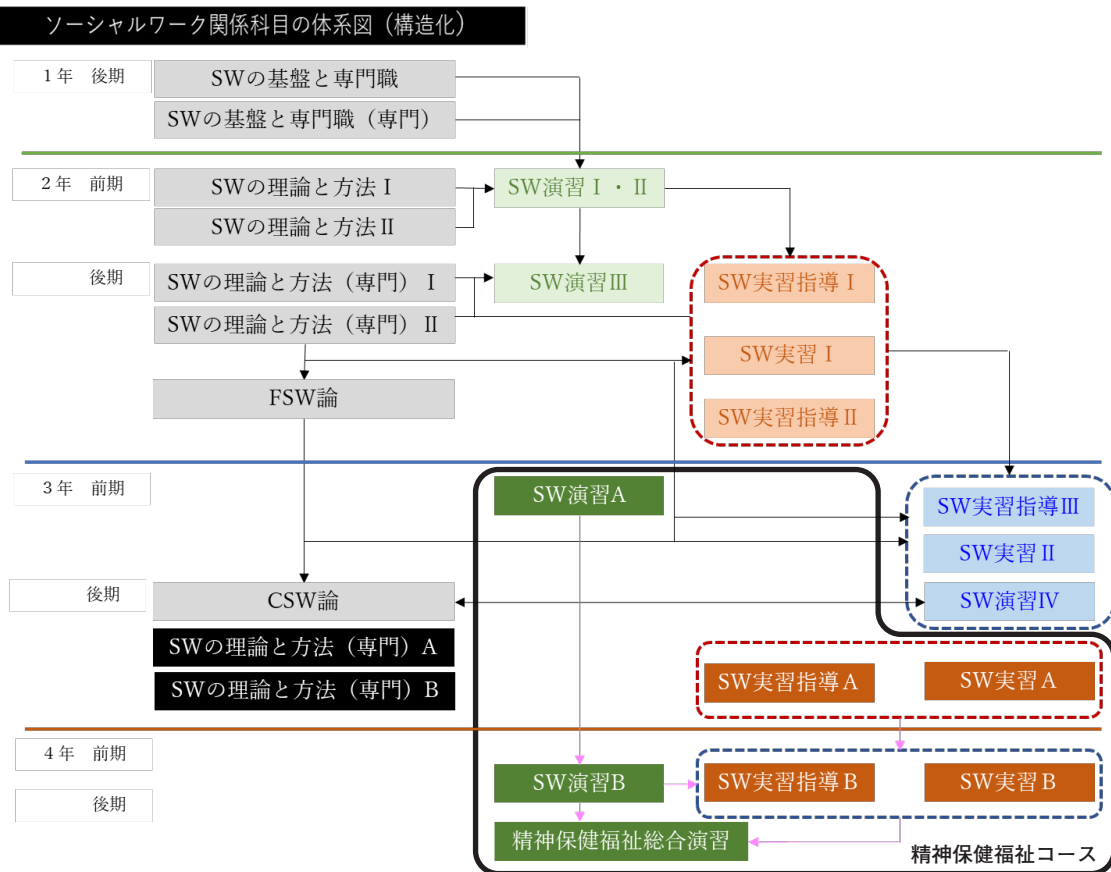
2) 山口県立大学 名誉教授

I. はじめに一研究の背景と目的一

1997(平成9)年の精神保健福祉士法成立によって精神科ソーシャルワーカーが国家資格として位置づけられ、その養成のためのカリキュラムが開

始された。以降、精神保健福祉士養成課程のカリキュラムは、現在に至るまでに二度の大きな改正が行われ、継続的に展開されてきた。国家試験受験資格を取得するための指定科目には演習・実習

図1 本学部社会福祉士養成課程・精神保健福祉士養成課程における科目構成と展開



出典)山口県立大学社会福祉学部「ソーシャルワーク実習ハンドブック—精神保健福祉士養成課程編—2025年度版」を一部改変して作成。

※精神保健福祉士養成課程の学習は、社会福祉士養成課程の積み上げとして、3年次前期「ソーシャルワーク演習A」より開始し、4年次後期の「精神保健福祉総合演習」まで継続する。

表1 本学部における精神保健福祉士養成課程卒業生数(2010~2024年度)

(単位:名)

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	計
人数	14	19	16	21	13	9	17	16	16	17	16	15	19	17	9	234

出典)宮崎作成。

※本学部入学定員は、1学年105名(2025年度入学生より87名)である。

上記卒業生は全員、社会福祉士養成課程を併修している。

なお、2025年度は、14名の学生が卒業予定である。

科目も含まれており、教育機関の教員のみならず、実践現場の実習指導者等からも高い関心が寄せられ、ソーシャルワーク専門職養成の取り組みが進められている。

山口県立大学社会福祉学部(以下、「本学部」)では、1994(平成6)年度の設置時に社会福祉士養成課程が開設された。2006(平成18)年度には、社会福祉士養成課程の積み上げとして精神保健福祉士養成課程が開設され、本学部は設置以降現在に至るまで、ソーシャルワーク専門職養成教育に取り組んでいる(図1)。筆者が担当している精神保健福祉士養成課程では、これまでに234名の卒業生を送り出している(表1)。2021(令和3)年度には、社会福祉士養成課程とともに新カリキュラムへ移行し、翌2022(令和4)年度からは「精神保健福祉コース」(学修コース)として養成教育を展開している。

筆者はこれまで、学生とともにさまざまな地域活動へ参加し、学生が学びのフィールドを広げながら体験型学習を積み重ねていくという教育プログラムに取り組んできた。今後、本学部の精神保健福祉コースとしての教育の質を高めていくために、これまでの養成教育の取り組みをふり返し、その教育効果を検証する試みが求められると考えた。

そこで、本研究では、本学部精神保健福祉コースにおいて、2017(平成29)年度より継続してきた「認知症の人と家族の会山口県支部」(以下、「家族の会」)が主催する認知症カフェへの学生の参加状況についてグループインタビューを通してふり返し、現場体験型学習がもたらす教育効果を検証することを目的とする。これにより、現場との協働による教育プログラムの開発のための示唆を得ることで、ソーシャルワーク専門職および地域人材の養成・育成のあり方を考察することを目指す。

Ⅱ. 認知症カフェでの現場体験型学習

本学部精神保健福祉コースが推奨する学外活動の一つに、認知症カフェへの参加プログラムがある。この活動は、家族の会の協力を得て、2018(平

成30)年2月に同会が主催する「若年性認知症の人のためのカフェ」に初めて参加して以降、現在まで継続している活動である。後掲表2は、これまでの学生の参加状況をまとめたものである。途中、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大によって参加できない時期があったが、現在までの約8年間で、計28名の学生が、延べ22回参加している。認知症カフェへの参加後には、家族の会が主催するイベントでのボランティアや、県が主催する認知症カフェサミットへの参画へと学外活動が広がっている。また、本領域にとどまらず、他領域の活動にも参加する学生もみられる。

以下は、学生が参加している認知症カフェ(定例開催)の概要である。

- ・運営(主催者):家族の会
- ・参加呼びかけのメッセージ
認知症の方やそのご家族、地域の方々が古民家に集まって飲み物を飲みながら、のんびり楽しい時間を過ごしたり、交流ができる、「カフェ○○○」を開催しております。どうぞお気軽においでください。
- ・開催日:毎月第3日曜日 13時開店(15時閉店)
- ・場所:古民家(懐かしい土間や大きな梁がある古民家)
- ・基本理念:認知症の人も家族も、専門職も地域の人も、日常会話を楽しみ、自由に思いを語ることができる時間と場所であること。
- ・参加費:ひとり100円(飲み物代として)

<ある1日の学生の活動例>

- 10:30~ 開店の準備(掃除、机・椅子のセッティング、コースター・お茶菓子用の懐紙へのスタンプ押し、のぼり・看板の設置など)
- 12:00~ ランチミーティング(スタッフ(世話人)の方との打ち合わせ)
- 13:00 開店(コーヒー提供後に会話)
- 15:00 閉店(片付け、掃除、洗い物など)
- 15:45~ ふり返しミーティング
- 16:30 活動終了

表2 学生の認知症カフェ活動への参加状況

(2018(平成30)年2月～2025(令和7)年12月)

活動年月	参加学生の学年・人数	参加したカフェ	教員参加の有無
2018年2月	3年生3名 (No.1, No.2, No.3)	若年性	あり
10月	・4年生1名 (No.1) ・3年生1名 (No.4)	若年性	あり
12月	3年生1名 (No.4)	若年性	なし
2019年3月	4年生2名 ((No.1, No.2)	若年性	なし
6月	・4年生1名 (No.4) ・3年生1名 (No.5)	若年性	なし
9月	・3年生1名 (No.5) ・1年生2名 (No.6, No.7)	若年性	あり
11月	3年生3名 (No.5, No.8, No.9)	定例	あり
12月	3年生2名 (No.5, No.10)	定例	なし
2020年2月	3年生2名 (No.5, No.11)	若年性	あり
2022年11月	3年生1名 (No.12)	定例	なし
12月	3年生1名 (No.13)	若年性 (市外開催)	なし
12月	3年生3名 (No.14, No.15, No.16)	定例	なし
2023年1月	3年生1名 (No.13)	定例	なし
2月	3年生1名 (No.13)	若年性	なし
7月	・4年生3名 (No.12, No.15, No.17) ・3年生2名 (No.18, No.19)	若年性	あり
2024年4月	4年生1名 (No.17)	定例	あり
7月	3年生2名 (No.20, No.21)	定例	あり
12月	3年生1名 (No.22)	若年性 (市外開催)	なし
2025年2月	3年生1名 (No.23)	定例	あり
4月	3年生1名 (No.24)	定例	あり
5月	4年生2名 (No.25, No.26)	定例	あり
7月	3年生2名 (No.27, No.28)	若年性	なし

出典)宮崎作成。

※表内のNoは、参加学生の実人数を示している。

表内の「若年性」は若年性認知症の人のためのカフェ、「定例」は市内の古民家にて月1回開催されているカフェのことである。

学生は認知症カフェの参加後、活動記録ノートに、当日の参加者の概況、活動内容、参加してまでの感想を記録する(写真1)。活動記録ノートに記載した感想は、家族の会の依頼を受け、毎月発行される都道府県版のニュースレターに掲載されている(写真2)。

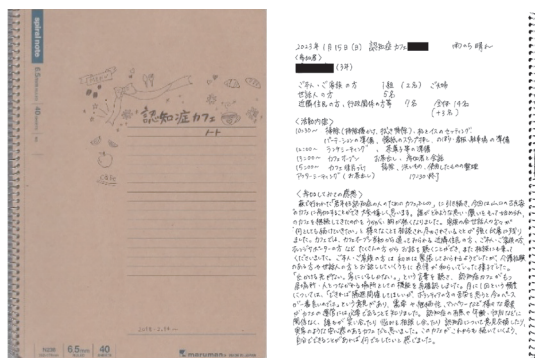


写真1 活動記録ノート

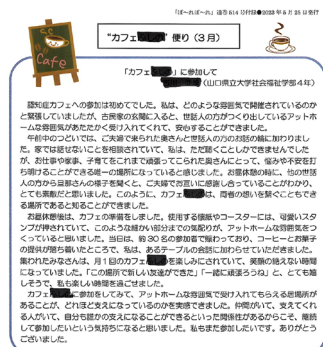


写真2 ニュースレターに掲載された学生の感想

Ⅲ. 研究の方法

1. 分析の視点・調査の方法

本研究では、認知症カフェでの学外活動を経験した学生を対象に、現場体験型学習の教育効果を検証することを目的として、グループインタビューによる質的分析を行う。グループインタビュー実施時の進め方および質問項目(インタビューガイド)は、本論文末に示している(資料1)。

グループインタビューは、2回実施する計画を立て、以下の内容で行うこととした。

1回目では、活動記録ノートおよび家族の会の都道府県版ニュースレターに掲載された学生の感想を参照しながら、認知症カフェへの参加の目的・思い、参加に至った背景や動機、得られた学びなど、各自の現場体験のふり返りを中心に、自由に語ってもらった。また、家族の会のスタッフ(事務局長)にも参加を依頼し、学生の受け入れに関する思いを語ってもらった。

2回目では、1回目の内容をふまえて、インタビューガイドに沿って、認知症カフェでの学外活動を通して得られた学び、活動中の戸惑いや困りごと、自己の変化や成長、身についた力、学生生活や進路選択に与えた影響、教員による学習支援、現場のスタッフによる活動支援、現場体験型学習に対する意見や考えについて語りを収集した。

なお、2回目に参加できなかった学生2名については、個別に依頼し、書面にて回答を得た。

インタビュー項目は8項目を設定し、作成したインタビューガイドに沿って実施した。得られた学生の語りは、インタビュー項目に基づきカテゴリ化した。分析に際しては、①参加の目的・思い、②学び得たこと、③学生生活や将来の進路選択に与えた影響、④教員による学習支援、⑤現場のスタッフによる活動支援、⑥現場体験型学習に対する意見や考え、の6点に整理して分析を試みた。

2. 対象者

本学部精神保健福祉士養成課程(本研究時に在籍し、3年次(2022年度)、4年次(2023年度)に、家族の会が主催する認知症カフェでの学外活動に参加した学生に対して、本研究への協力を依頼し、承諾が得られた6名である。

3. 倫理的配慮

研究協力者全員に対して、グループインタビュー開始前に、本研究の目的と方法、研究

参加の任意性と参加撤回・辞退の自由、個人情報保護の確保、得られたデータの利用範囲および研究成果の公表、研究参加によって生じ得る利益と不利益、本研究の科学的価値や当該領域・社会に対する貢献、謝礼、利益相反について、研究同意説明文書および口頭にて説明した。研究協力者の承諾と署名を得た研究参加同意書2通は、研究協力者と研究責任者がそれぞれ保管することとした。

なお、研究協力者は、グループインタビュー実施時点で成績評価がすべて終了している学生であり、研究参加の任意性に影響を及ぼすことはないと判断した。また、グループインタビューという形式(方法)をとることで、研究協力者個々の負担は軽減されると考えた。

本研究の実施にあたっては、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得た(承認番号【2023-40】)。

IV. グループインタビューの結果・分析

本研究協力者であるグループインタビューへの

参加者は、学生6名と家族の会のスタッフ(事務局長)1名であった。学生は、前掲表2に示したNo.12からNo.17までの6名であり、その概要は後掲表3にまとめた。

グループインタビューは、既述の通り2回実施した。

第1回は、学生6名、家族の会のスタッフ(事務局長)1名、教員2名(内田・宮崎)が参加し、約1時間30分で終了した。

第2回は、学生4名、教員2名(内田・宮崎)が参加し、約2時間で終了した。実施当日に参加できなかった学生2名については、後日書面にて回答を得た。

2回実施したグループインタビューを通して得られた学生の語りを、①参加の目的・思い、②学び得たこと、活動中の戸惑いや困りごと、③学生生活や将来の進路選択に与えた影響、④教員による学習支援、⑤現場のスタッフによる活動支援、⑥現場体験型学習に対する意見や考え、の6点にまとめ、整理した。グループインタビュー終了時には、自由に感想を述べてもらった。

表3 グループインタビュー参加学生(研究協力者)の概要

参加学生	認知症カフェの参加学年・回数	その他の学外活動経験	卒業後の進路(就職先機関、職種等)
No. 12	3年: 定例1回 4年: 若年性1回	あり	精神科医療機関・精神保健福祉士
No. 13	3年: 若年性2回 3年: 定例1回	あり	精神科医療機関・精神保健福祉士
No. 14	3年: 定例1回	あり	精神科医療機関・精神保健福祉士
No. 15	3年: 定例1回 4年: 若年性1回	あり	精神科医療機関・精神保健福祉士
No. 16	3年: 定例1回	あり	総合病院・医療ソーシャルワーカー
No. 17	4年: 若年性1回 4年: 定例1回	あり	障害福祉サービス事業所・職業指導員

出典)宮崎作成。

※表内の「定例」は、月1回開催される認知症カフェである。「若年性」は、若年性認知症の人を対象としたカフェであり、年に数回、県内の場所を変えて実施されている。

表内のNo.は前掲表2と対応している。

以下より、結果について表4～表9にまとめる。

1. 学生の参加の目的・思い・動機・背景等(表4)

参加学生の目的・思いは、①現場体験型学習を通して学びたい、②高齢者福祉、認知症への興味・関心、③個人的体験、の3つに整理できた。概観すると、①は、現場体験型学習に対する期待が込められ、学習ニーズが支えとなっていた。②は、専門領域への興味・関心であり、この場合、高齢者福祉や認知症に対する明確な学習テーマとなっていた。③は、個人的体験によるものであり、6名中2名が、家族としての体験を語っていた。また、「周囲に認知症のある人がおらず、自分が考えているその人の像やイメージが偏ったものではないかと思い、かかってみることで視野を広げなかった」との目的・動機を述べる学生もいた。これらの動機は、社会福祉学部への志望理由と少なからず関連し、ソーシャルワーク専門職を目指す志向が基盤にあることがうかがえた。

当該世代の学生は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)禍を経験していた。このことから、「人とかかわる機会がなかった」と共通して述べていた。このことから、学外活動への参加を通し

て、これまでかかわることのなかった他者とのかわりに期待を寄せていた。かかわる機会が大事であると思っている背景には、前述の社会福祉学部への志望理由と関連し、意識の高さや学びの基礎が備わっていることが、現場体験型学習への参加意欲へとつながっていると考えられた。「人とかかわりたい」「つながりたい」「視野を広げたい」といった目的動機は、ソーシャルワーク専門職に求められる、他者に向けられる関心や理解などであり、ここに気づきのある学生は、総じて意識の高い学生であるといえる。結果、経験を通して学ぶ、現場体験学習に対するしっかりとした目的動機が、学びの基盤としてあることがわかった。

以上のことから、学生の目的・思いは多面的な動機を示しており、学外活動に参加する学生の一つの特徴といえる。また、学生全員が複数の目的・思いを語っており、特に、意欲、専門的関心、個人的体験が相互に関連して動機を形成している点は、ソーシャルワーク専門職養成教育におけるロールモデルとなり得る学生像であるといえよう。

表4 学外活動への参加の目的・思い

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
参加の目的・思い	現場体験型学習を通して学びたい	<ul style="list-style-type: none"> ・入学後にいろいろなかかわり、ボランティアを経験したいと思っていた。 ・ソーシャルワーカーを目指すにあたってかかわりが大事になると思った。 ・学内や実習だけではつながることのできない人や普通の生活の中では出会わない人とつながる機会になると思った。 ・座学だけでは学べない部分を吸収したい。 ・将来何がしたいかが不明確であり、精神保健福祉士養成課程の学習をしながら視野を広げたい。 ・周囲に認知症のある人がおらず、自分が考えているその人の像やイメージが偏ったものではないかと思い、視野を広げなかった。 ・将来ソーシャルワーカーとして働く際に、社会資源としての認知症カフェを知っておくと紹介ができたと思った。 ・授業でピアサポートについて学び、当事者で支え合う活動に関心を持った。 ・それぞれのライフヒストリーや環境の違い、どのような思いや考えがあるのかを知りたい。

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
	高齢者福祉、認知症への興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> ・入学時より高齢者福祉、特に認知症に興味があった。 ・高齢社会で認知症のある人とかかわる機会が増えると思った。 ・ソーシャルワーク実習で認知症のある利用者と多くかかわり、認知症の人が暮らしやすい社会に向けて、自分ができることは何かを考えるようになった。 ・学内で開催された認知症講座で学んだことがきっかけとなった。 ・高齢者福祉領域でのソーシャルワーク実習やボランティア経験はなく、かかわりたいと思った。
	個人的体験	<ul style="list-style-type: none"> ・家族が認知症で、認知症のある人と話すことが怖いという経験があった。 ・認知症の家族がいて、当時認知症カフェは一般的ではなかったが、その場があれば、介護を担う家族が楽になったのではないかと思った。

2. 参加を通して得た学び (表5)

学生は、認知症カフェへの参加を通して、学生として、一人の人として受け入れてもらうことで、認知症等のある本人、その家族、スタッフや関係者、専門職のいろいろな立場を超えてつながることの大切さや、ただそこに居て、一緒に話したりすることの重要性を学んでいた。

学生が得た学びは、①認知症カフェの特徴・役割、②本人・家族に対する理解、③スタッフ（世話人）の役割、④学生の役割、の4つに整理できた。これらは、認知症カフェを地域の資源として理解するだけでなく、ソーシャルワーク専門職になるための基盤を涵養する学習成果であるといえる。

①認知症カフェの特徴・役割では、学生は、多様な主体が参加する「開かれた場」であり、自由な交流や安心できる空間づくりを通して、地域の相互交流を促す機能について理解していた。

②本人・家族への理解では、家族の語りから心理的葛藤や負担を知り、思いを容易に捉えられない難しさを実感していた。また、気軽に話せる場だからこそ悩みが表出されること、本人の役割の獲得や当事者同士の支え合いの意義を学んでいた。

③スタッフの役割では、「その人を見る」姿勢

の重要性や、手づくりの装飾や空間づくりなどのあたたかい場を生み出す専門職スキルに気づき、スタッフの専門性が空間づくりに表れることを理解していた。

④学生の役割では、「話し相手になるだけでも意味がある」と実感し、一人の人として受け入れられた経験が、自己理解・自己覚知につながる契機となっていた。

以上のことから、学生の学びは認知症カフェの機能や役割の理解にとどまらず、本人、家族、スタッフ、そして自分自身という多様な視点からの理解へと広がっていた。認知症カフェへの参加を通して、人とかかわることの意味や本人、家族のリアルな思い、地域の支え合い、環境づくりの重要性に気づき、ソーシャルワーク専門職としての視点や態度を体験的に学び、変化・成長へとつながっていた。

次に、学生が現場体験型学習に参加する中で経験した戸惑いや困りごとは、①直接的な活動場面における戸惑い、②学外活動への参加を取り巻く環境面の課題、の2つに整理できた。

活動場面では、特に初回参加時に、流れや自分の役割が不明確で、何をすべきかが判断できない不安や迷いが生じていた。また、本人と家族の区別がつかず会話の進め方に困ったり、席を立つタ

イメージや会話への入り方に悩む場面が多かった。学生が着席したことで参加者同士の交流を妨げたのではないかという反省や、家族同士の深刻な語りに入りづらく、自分の存在の受け止められ方に不安を残したという声もあった。その他、家族の強い感情表出に直面した際の対応に戸惑い、適切なかわり方を検討できないまま活動を終え

た学生もいた。一方で、現場のスタッフの存在が安心材料となり、その場での支援がライブスーパービジョンとして機能していた例もみられた。

環境面では、学業との両立による日程調整の難しさ、交通手段や移動時間・費用の負担、場所の分かりにくさなどが継続参加の妨げとしてあげられていた。

表5 参加を通して学び得たこと

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
学生が得た学び	認知症カフェの特徴・役割	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれ個性があり、その地域に合わせた活動が行われている。 ・本人、家族、スタッフ、各専門職などの多様な人の参加がある。 ・スタッフも家族も、本人のために何ができるのかを考えながら活動している。 ・立場を超えたつながりがあることの大切さ。 ・固定のプログラムがないことで、自由な会話や笑顔が生まれている。 ・古民家を使用したリラックスできる空間である。
	本人、家族に対する理解	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の話や視点から、本人に対する思いを知った。 ・一見明るい印象のある家族でも悩みを抱えていると知った。 ・「かしこまらない場」で表出される本人、家族が有するリアルな悩みや大変さを知った。 ・本人の「誰かの役に立つ」という経験が自信につながることを知った。 ・当事者同士の支え合いの重要性。 ・本人や家族の思いは簡単にはわからない。
	スタッフ（世話人）の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフのかかわりを見て、ソーシャルワーカーとしてのかかわりを学んだ。 ・知識や経験に頼り過ぎず、「その人を見る」姿勢の重要性。 ・地域で本人、家族を支えるという視点。 ・雰囲気づくり、空間づくりおもてなしの工夫。 ・自然な雰囲気づくりには高度な技術が必要になる。
	学生の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ話をするだけで笑顔が見られ、自分にもできることがある。 ・話し相手になるだけでも意味がある。 ・学生の立場だからこそ「教わる」役割がある。 ・学生としての立場を受け入れられ、ひとりの人としてかかわることができる。
戸惑いや困りごと	直接的な活動場面	<ul style="list-style-type: none"> ・初回参加時に、当日の流れやプログラムの有無などがわからず、何をしてもよい、戸惑うことがあった。 ・家族と思って話をしているうちに本人であると気づいたことがあった。話し相手が自分でよかったか、会話を続けてよい、席を立つタイミングをどうすべきか、さまざまな迷いが生じた。 ・家族か本人かが、わからないままかかわり、途中で不安になった。 ・自分が着席したことでそのテーブルが学生中心の会話になってしまい、本人や家族が、他の人とかわり合う機会を減らしてしまったのではないかと感じた。

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
		<ul style="list-style-type: none"> ・家族同士で日々の悩みについて話しているときに入っていけず、話を聞くだけで終わってしまった。家族の思いを知るという学びにはなったが、その家族は、自分（学生）がその場に居ることに対してどう思ったかと気になった。 ・家族との会話の中で、強い言葉や怒りの感情、認知症カフェへの否定的な発言が表出され、自分ひとりで聞いていてよいのかと不安になった。
	取り巻く環境面	<ul style="list-style-type: none"> ・日程が合わずに参加できないことが多かった。 ・学業との調整が難しく、無理をして参加したことがあった。 ・所在地や交通手段に不便さがあり、物理的に参加が阻まれてしまうことがあった。 ・他地域（市外）で開催される場合は、交通費や移動時間が負担になることがあった。

3. 学生に与えた影響（表6）

学生に与えた影響については、①日頃の学生生活、②将来の進路選択、の2つに整理できた。

①日頃の学生生活に対しては、認知症カフェへの参加を通して初対面の人との関係づくりに自信を持てるようになり、ソーシャルワーク実習での患者とのかかわりに活かしていた。多様な立場の人の思いや葛藤を理解しようとする姿勢が生まれ、傾聴、受容、共感の難しさを体験的に理解することで成長につながっていた。また、日々の生活の楽しみや励みとなり、興味・関心のあることに挑戦する行動力や視野の広がりも生まれていた。

学外活動の経験は、ゼミ活動やソーシャルワーク実習にも結びつき、場づくりや企画・運営の視点を学ぶ機会となっていた。家族の語りを通して本人・家族の思いに触れ、地域で暮らす認知症のある人への関心が高まり、認知症サポーター講座の受講や卒業研究のテーマ選択にも影響していた。

さらに、会話を「楽しむ」ことの大切さを学び、認知症のある人を一人の生活者として理解する姿勢が生まれ、ソーシャルワーカー像について考える契機にもなっていた。

②将来の進路選択に対しては、学外活動を通して得た地域とのつながりが精神科医療機関への就

職を後押しした語りや、ピア活動への関心が育まれ、就職先で実践したいという具体的な目標としての語りなどがあった。また、学外活動で家族の思いに触れたことで、「人とかかわることが好きだ」と気づき、精神保健福祉士として働く道を選ぶ決意が固まったという語りもあった。本人の生活を支えるためには家族支援が不可欠であり、認知症カフェのような場がその支えになると理解したことも、進路選択の動機となっていた。

さらに、学外活動で培った会話の技術が就職予定先で役立つなど、実践的な力の獲得に関する語りもあった。その他、これから社会人になるにあたって、認知症に関するニュースに関心を持つようになるなど、意識の変化も生じていた。

総じて、認知症カフェでの経験は、学生が将来の進路について具体的に描くきっかけとなり、ソーシャルワーク専門職として必要な知識や技術はもとより、姿勢や価値観も涵養する重要な学びとなっていた。

表6 学生に与えた影響

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
学生に与えた影響	日頃の学生生活への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて出会う人との関係づくりにおいて、自分の得意がより強固となり、自信につながった。このことが、3年次の精神科医療機関での実習で、患者の方との関係づくりに活かすことができた。 ・いろいろな立場の人の思いや葛藤を全部受け取り、鵜呑みにするのではなく、思いや考えを知ることが大切である。 ・認知症カフェへの参加予定が入るとワクワクし、日々を頑張る糧となった。このことが、生活の中での息抜きやリフレッシュにつながった。 ・少しでも興味・関心のあることはやってみようと思えるようになった。 ・将来いろいろな人とかわったときに役に立つ力を持っておけるようにしたいと思うようになった。 ・3年次の精神科医療機関での実習で認知症専門医療機関を選択したいと思った。 ・学内のゼミ活動において、当事者会（「きょうだい会」）を運営する際に認知症カフェでの雰囲気づくりや進め方が役に立ち、学びと学びにつながった。 ・ゼミ活動で、家族の会主催の交流・研修事業や県主催の認知症カフェサミットに参加した際に、スタッフ目線で企画・運営面を知ることができた。 ・人の話を聞くときに求められる傾聴、受容、共感難しいことであり、安易にわかるとは言えないことを理解した。今も考え続けていることが成長であると思う。 ・新しい知識や考え方を身につけることができた。 ・学内での学び、ソーシャルワーク実習での学びと重ねることで深められた。 ・初回の体験がよかったことで、次の動機や意欲を高めることになった。 ・卒業研究（論文）のテーマとなった。 ・ソーシャルワーク実習では、目的ありきの会話となっていたが、その基礎には、本人との会話を楽しむことが必要だと考えるようになった。会話を楽しむことで、認知症のある人として接するのではなく、地域に住んでいる人として接することができ、本人を知ろうとする姿勢にもつながると思った。 ・地域で生活している認知症のある人に対して関心を持つようになった。どのようなことに困り、どのような支援を求めているかを知りたいと思うようになり、認知症サポーター養成講座を受講することにした。 ・初対面の人とどのように話し始め、会話を続けていけばよいかについて体験的に学んだ。

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的な内容
	将来の進路選択への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・将来のソーシャルワーカー像を考えるきっかけになった。 ・精神科医療機関への就職の決定において、同地域での認知症カフェへの参加を通じたつながりがあったことが最後の一押しとなった。 ・就職先の医療機関で、ピア活動をやってみたいと思うようになり、進路を決定する上での目標となり、背中を押してもらった。 ・就職試験の応募書類に認知症カフェ活動への参加経験を記載したところ、面接時に肯定的フィードバックを受けた。 ・認知症カフェでの家族とのかかわりによって、精神保健福祉士の道に進みたいと思った。 ・人とかかわることがしたい、それが好きだ、と気づいた。 ・本人と一緒に暮らしたい思いがある家族に対して力になればと思い、この領域での進路を決めた。就職先において、本人や家族の支援をしていきたい。 ・学外活動に参加することで身についた会話の技術が、就職先において自分自身を助けてくれると実感している。 ・認知症関連のニュースが出ると確認するようになった。

4. 教員による活動前・後の学習支援（表7）

教員による学習支援は、①参加の呼びかけ・情報提供、②活動記録ノートの活用、③事前学習・準備への助言、④活動への参加（ライブスーパービジョン）、⑤活動後の振り返り、の5つに整理できた。

①参加の呼びかけ・情報提供では、教員による直接的な案内や授業内での紹介が参加のハードルを下げたとのことであった。学生は、自分では得にくい認知症カフェの情報が提供され、活動内容やスタッフ、先輩の参加状況が具体的に示されたことで、活動のイメージが明確になり、安心して参加できていた。

②活動記録ノートの活用では、初回の参加者にとって活動の様子を事前に知ることのできる「申し送り」として機能し、不安の軽減につながっていた。また、記録を書くことで体験を言語化し、先輩学生の記録の閲覧から異なる視点に触れるなど、深い学びへとつながる支えとなっていた。

③事前学習・準備への助言では、教員からの情報が過度に多くなかったことが、学生の興味・関心を高め、体験を通して学ぶ余地の見守りとなっていた。説明をし過ぎないといったことも、学生

の主体的な参加意欲を促進し、心理的支援となっていた。

④活動への参加（ライブスーパービジョン）では、教員が現場に同行しているという行動そのものが学生の安心感につながっていた。このことから、学生の心理的負担を軽減していたと考えられた。

⑤活動後の振り返りでは、教員との意見交換や記録作成が学びを整理し、他の授業や実習で想起されるなど、学習の連続性を生み出していた。また、振り返りが次回の参加意欲を高めるなど、学習の循環を生み出す役割を果たしていた。

次に、教員による学習支援の不足点・改善点について、事前学習、ライブスーパービジョン、活動後の振り返り、参加環境の整備、といった複数の側面において、課題があることがわかった。

まず、事前学習や準備に関する助言や配慮について、参加前に必要となる最低限の予備知識や心構えに関する助言が不足していたという指摘があった。学生は、活動前に「知っておいたほうがよい情報」が提示されることで、初回参加時の不安が軽減され、より主体的に活動に臨めたと考えていた。

活動への参加（ライブスーパービジョン）について、教員と同じ場に居合わせる機会が得られなかった学生からは、ライブスーパービジョンを受けられなかったことへの物足りなさが示されていた。実際は、教員の目を気にすることなく、自由に、のびのびと学んでいるが、教員とともに活動した学生の活動記録の閲覧や話を聞く中で、「今、ここで」のフィードバックが学びを深めるうえで有効であると認識し、その機会を得たかったという声があった。

活動後のふり返りは、一定程度実施されていたものの、「参加し過ぎて迷惑ではないか」という葛藤を抱えた学生は、その不安を教員に相談でき

れば継続参加がより支えられたと述べていた。このことから、ふり返りの際に、学生への心理的支援や継続参加の動機づけが求められると示唆された。

参加を取り巻く環境面について、学生は、活動場所がわかりづらかったことから、活動記録ノートに地図があるとよかったと述べていた。また、学業との調整が難しい時期にはスケジュール面の支援が必要であり、交通費や移動時間の負担が参加の大きな障壁となったことを語っていた。これらから、学外活動の継続性を確保するには、教育的支援はもとより、物理的・経済的な環境整備についての検討が要されると示唆された。

表7 教員による学習支援

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
教員による学習支援	参加の呼びかけ・情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ・教員から情報を得たことで参加しやすかった。 ・授業時に直接呼びかけがあり、教員に伝えやすく、参加のハードルが下がった。 ・単なる呼びかけではなく、主催団体やスタッフ、活動内容に関する情報、先輩学生の活動状況なども含めて紹介があり、イメージが持ちやすくなり、安心して参加できた。 ・ひとりでの参加はハードルが高いので、情報があることで気軽に参加できた。
	活動記録ノートの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・活動記録ノートの閲覧によってある程度活動内容が把握できた。 ・活動記録ノートが申し送りの役割を果たし、活動の概要や先輩学生の参加状況がわかった。学生として何をするかが想像できたことで不安が軽減され、参加のハードルが下がった。 ・帰学して、活動記録ノートを見たときに、「同じところを学んでいる」「違う視点を持っている」といった先輩学生の体験も含めてふり返ることができた。 ・帰学して、活動記録ノートを書く段階で体験や学びを言語化すると感覚的学びが整理でき、冷静にふり返ることができた。これにより、次の活動時の取り組み課題が明確になった。
	事前学習や準備に関する助言や配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・教員による説明時の情報と、活動記録ノートの閲覧による情報が多過ぎなかったことで興味・関心が引き立てられた。
	活動後のふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ・活動後も教員とのふり返りの時間がある。 ・「行って終わり」ではなく、帰学してから活動記録を書いたり、教員とふり返ったりすることで意見交換ができ、学びが積み重なった。 ・学びを整理することで、その後の他の授業やソーシャルワーク実習時に思い出され、さらに学びが深まった。 ・帰学して、教員と体験や気づきを共有することで次の参加意欲へとつながった。

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的な内容
不足点・改善点	事前学習や準備に関する助言や配慮	・参加前に「これは知っておいたほうがよい」といった予備知識の提示や助言があるとよかった。
	活動への参加（ライブスーパービジョン）	・教員との参加のタイミングが合わず、ライブスーパービジョンや活動後のフィードバックの機会が得られなかった。 ・教員と参加した学生は、ライブスーパービジョンやフィードバックを受けることでよい学びになっていて、うらやましく思った。
	活動後のふり返り	・参加し過ぎても迷惑になるのではないかと不安があったので、その葛藤を教員に話せばよかった。
	参加を取り巻く環境面	・活動記録ノートに地図があるとよかった。 ・学生生活が忙しい時期と重なると継続参加ができなかった。 ・継続参加を見据えて、カリキュラム全体として学外活動やボランティアが行いやすいスケジュール調整の支援があるとよかった。 ・参加したいができないという学生に対する支援として、交通費や参加費の補助があればより参加しやすかった。

5. 現場スタッフによる活動支援（表8）

認知症カフェにおける現場スタッフのかかわりは、学生の安心感を高め、学習効果を促進する重要な活動支援となっていた。支援内容は、①受け入れ、②ミーティングへの同席、③活動中の指導や助言、の3つに整理できた。

①受け入れについて、学生は、活動初回からあたたかい雰囲気迎え入れられ、リラックスして活動に臨めるような配慮によって心理的ハードルが大きく下がったと述べていた。また、当日にケアパートナー養成研修へ参加する機会が得られたことは、予期せぬ学びの広がりを生み、本活動への動機づけを高める要因となっていた。

②ミーティングへの同席について、事前準備やランチミーティング、閉店後のミーティングなど、運営側の会議に同席できたことは、有意義な学びとなっていた。これらのミーティングは、自然な雰囲気の中で行われていたため、緊張せずに学びを吸収できたと述べており、同時に運営面の理解も深まっていた。

③活動中の指導や助言について、学生の多くの疑問に対して丁寧な説明を受け、認知症カフェの歴史や認知症に関する知識を得ることができ、特

に、開店前の助言がその日の活動に直結して活かされた点は、「今、ここで」の学習効果を生んでいた。また、活動中に迷った際には具体的な指示を得ることで、学生は安心して行動できていた。さらに、スタッフが本人や家族との間に自然に学生をつないでくれたことで、学生は無理なくかかわることができ、実践的な学びが促進されていた。

現場のスタッフへの要望については、①活動後のふり返りの機会の確保、②初回参加時の最小限の情報提供、③質問のための時間の確保、の3点があげられていた。これらは、学生がより安心して活動に臨み、学びを深めるために必要とされる支援である。

表8 現場スタッフによる活動支援

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
現場スタッフによる活動支援	受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・あたたかい雰囲気を受け入れてもらった。 ・緊張し過ぎず、リラックスして参加できる配慮があった。 ・当日ケアパートナーの養成研修があり、参加する機会を得た。
	事前・事後ミーティングへの同席	<ul style="list-style-type: none"> ・ランチミーティングで運営側スタッフの思いを知り、午後のご本人、ご家族とのかかわりに活かすことができた。 ・普段の雰囲気のまま自然に受け入れてもらった。 ・学びたいことを尋ねられ、活動中にできることの提案や助言があった。 ・閉店後のミーティングでは、当日の反省点や運営上の葛藤、課題があることも教わり、その場に居ながら見聞きして学んだ。 ・固くなり過ぎずに教わることができ、緊張が和らぎ、取り組むことができた。その時々々のタイミングでさらっと教示してもらうことが印象に残り、安心して活動できた。 ・運営面のこともわかった。
	スタッフの指導や助言	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの疑問、質問に細かく丁寧に教えてもらった。認知症カフェの歴史や認知症に関する知識を教わり、本人、家族と話すことができた。開店前の助言は、すぐに活かすことができるのでよかった。 ・活動中にどこに行ったらよいかと迷っていると「ここに座っていいよ」「ここでお話をしているよ」と、安心して話ができるための具体的な助言があった。 ・本人や家族の間に入って自然につないでもらった。
	要望したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・当日のふり返りが難しかったので、その機会があればよかった。 ・初回参加時に、本人か家族かなどの基本的な情報について、少しだけ教えてもらえると安心できた。 ・活動後に質問ができる時間をとってもらえるとよかった。

6. 現場体験型学習に対する意見や考え (表9) ら、主に①学びの深化、②参加を促すための支
 学生の現場体験型学習に対する意見や考えか 援、の2つの教育効果が整理できた。

表9 現場体験型学習に対する意見や考え

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
教育効果	学びの深化	<ul style="list-style-type: none"> ・人から聞く、人から学ぶ、その生活の一部を一緒に空間で共有することで、自分が感じる量の量が多かった。 ・座学よりも学びが蓄積されると感じた。この蓄積が、他の学外活動への参加の動機や自信、多方面の興味・関心につながった。 ・新たな自分に気づくという意味をもたらした。 ・活動前に自分が持っていた偏見やかかわり方の癖などを客観的に捉え直す機会になった。 ・大学から離れた活動の場であることでリセットされ、吸収することが多いと感じた。 ・五感で感じる体験であり、言語化できない部分を感じることができた。 ・現場に出る前にこのような機会があつてありがたかった。

カテゴリ	サブカテゴリ	学生の語りの中心的内容
		<ul style="list-style-type: none"> ・活動前は不安が大きかったが、回を重ねていくごとに毎回参加してよかった、学びがあった、と感じている。 ・失敗があっても学生の立場を強みに参加でき、教員による支援もあったことで挑戦できた。この体験が大きな力になった。 ・認知症カフェでの活動を積み重ねていくことが、全国研究集会や県の認知症カフェサミットの参加へとつながった。ミクロ、メゾの視点からマクロの視点へと連続してとらえることができた。 ・受動的な学びではなく、能動的に、関連づけて取り組むことができた。 ・学習過程で、認知症カフェで出会った人の顔が思い浮かぶことがあり、言葉や表情、声などを感じながら学ぶことに意義や強みがあると思った。 ・表面的に理解するのではなく、自分なりに考えることのできる効果があると思う。 ・参加者の話を聞き、表情を見ることで、笑顔で参加できるためにはどのような工夫が必要なのかを考えることができた。 ・スタッフとかかわり、それぞれが大切にしていることを知ることができた。 ・学生自身の意識が1番大きいと思っている。学生時代の活動経験は、就職後や今後の生活の中のどこかで活かされてくるという考え方があり、積極的に参加した。参加を通して得られるものは知識や経験だけではなく、ソーシャルワーク実習以外ではあまり得られない技術である。
	<p>参加を促すための支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・金銭面や時間的な制約に対する支援。 ・参加学生から話を聞く機会の設定。 ・授業内容と連動した呼びかけ。 ・ソーシャルワーク実習時に利用者とのコミュニケーションに課題があった学生や、かかわりが難しいと悩む学生に勧める。 ・後輩学生に対して、学生時代から自分の出身地や就職先の各地域での活動を知っておくことは、卒業後の自分を助けてくれると伝える。 ・学外活動に参加した卒業生との交流プログラムで体験談を聞く。

V. グループインタビューを実施して一まとめにかえてー

1. 学生の現場体験型学習を通して得た学びの活かし方ーグループインタビュー後の感想ー

- ・グループインタビューによって間接的に他の学生の学びを聞く機会となり、この時間自体が大きな学びとなった。これから働く中で、人と人とのかかわりを大事にしていきたい。
- ・これまでの現場体験型学習をふり返ることができ、自分の中に落とし込むことができた。社会人になっても日々勉強していくことが大切だと感じた。就職先の新しい土地で、その土地の社会資源を学んだり、認知症カフェや研修会にも積極的に参加して知識を獲得し、経験を積んでいきたい。
- ・ご本人、ご家族、現場のスタッフなど、多くの人に支えられて現場体験型学習が成り立っていたことを思い返し、感謝の気持ちを抱いている。地域人材として、今後も「人と出会うこと」を大切にできるソーシャルワーカーになりたい。「人と出会うこと」を続けながら、これを自分のライフサイクルの中でも大切にしていきたい。
- ・今までの学外活動が、学生生活の中で大きな学びをもたらしてくれたと感じている。その場でしか学べないことの多さを実感し、これを後輩学生にもぜひ体験してほしいと思った。社会に出てからも、ご本人やご家族を支え、一緒に歩いていく過程でのかかわりから学び、知ろうとする姿勢を大切にしていきたい。また、経験や知識に頼り過ぎず、「その人を見る」ということを意識して、研修会などにも積極的に参加することで成長していきたい。
- ・多くの気づきや学びを得ることができ、貴重な経験となった。学生のうちにさまざまな活動に参加することは、その活動について考えるとともに、自分自身のことも考えるきっかけになる。ソーシャルワーク専門職として働くにあたって、今後も地域活動に積極的に参加し、本人と地域の橋渡し役となり、地域で支える一員

になりたい。

- ・活動への参加当時は「認知症カフェに行っている」という感覚であったが、ふり返ってみると貴重な経験ができたと思った。この経験が、就職先でのコミュニケーションにつながると感謝している。学び得た知識や技術、経験を、これから出会う利用者の地域生活のために活かしていきたい。また、地域での取り組みや活動に積極的に参加し、学び続けていきたい。

2. 家族の会の学生を受け入れての思い

学生の参加によって、ご本人、ご家族の様子が変わるということ学んだ。普通に、若い学生とかかわるということが大事である。

認知症になることで、ご本人やご家族は、いろいろなことに直面し、葛藤もあつたりすると思うが、認知症カフェの場に行き、学生と接していると、人生の先輩として「わしらの頃は、こうでね」みたいな、いろいろな経験を話すことができる。その話を学生が、しっかりと素直に聞いている姿を見ていると、認知症とか関係なく、人生を生きてきた人が若い人に伝えている、という場になっている。

認知症と言ってしまうと、どうしても先入観が出たりする。経験がなければなおさらである。これから先、学生がソーシャルワーク専門職になっていく上で、ご本人やご家族とどのように接していけばよいのかということに、この経験が活かされると思う。専門職から見るとということよりも、一人の人として、1対1の関係で見ることが、大事なベースになっていくことを、現場に出る前に学んだことが大切なのだ実感している。

ご本人にとって、家に閉じこもるのではなく、あるいは、施設や病院に行き、同じような方々と接するのではなく、地域でいろいろな人と一緒に交流できる場があるということ、そして、そういう機会に学生と一緒にいるということが、よい学びの場の提供になると改めて感じた。

学生の語りに、雰囲気づくりや空間づくりが難しいとの話があった。それはおそらく、専門職ス

キルのことである。認知症カフェでは、スタッフとして、医師、看護師、介護福祉士、ケアマネジャー、ソーシャルワーカーなど、多職種がかかわっている。また、家族としての経験を併せ持つスタッフもいる。仕事をリタイアした人も現役の人もいる。かかわるスタッフ各々が培ってきた専門職スキルを無意識に発揮できていることの気づきも重要であると思う。

Ⅵ. 考察—現場体験型学習がもたらす教育的意義とソーシャルワーク専門職養成のあり方—

グループインタビューにおける学生の語りを総合的に検証した結果、認知症カフェでの現場体験型学習は、多面的かつ大きな教育効果をもたらしていることが明らかになった。そのもたらされた教育効果の特徴と意義について整理し、今後のソーシャルワーク専門職養成のあり方を考察する。

1. 多面的な教育効果とソーシャルワーク専門職になるための基盤の形成

学生のさまざまな語りから、認知症カフェの場での実践的体験は、単なる知識や技術の習得にとどまらず、関係づくり、他者理解を通しての自己理解、さらにはソーシャルワーク専門職を目指していくキャリア形成に至るまで、多面的な教育効果をもたらしていることが確認できた。特に、認知症のある本人、家族、現場のスタッフ等関係者、地域住民などの多様な主体と直接かかわる経験は、座学やソーシャルワーク実習では得がたい学びを可能にし、学内での学習と連動させ、深化させる重要な学習機会となっていた。

学生の学びは循環しており、これを支えていたのが現場のスタッフによる活動中の支援と教員による活動前後の学習支援であることが確認できた。教員の学習支援は、現場のスタッフの活動支援と協働することで有機的に機能し、このことが学生の学びを支持し、促進するものとなっていた。現場のスタッフの受け入れや活動中の指導や助言は、学生が安心して参加できる学習環境をつ

くり、また、教員の学習支援、具体的にはふり返りやスーパービジョンが体験を意味づけ、次への参加意欲を高めるとともに、関心や探究心、主体性を育むことにつながっていた。学生は、教員と認知症カフェに参加した際に、それをライブスーパービジョンとして受け止めており、学びを深化させ、学習成果へと結びつけていた。

グループインタビュー時に、「参加し過ぎてよいのか」という学生の葛藤や不安を知る機会となった。学生自身が教員に相談すればよかったとふり返っていたが、教員としてこの不安に気づき、適切なフィードバックを行う必要があったと反省している。この点は、今後の学習支援の改善に向けた重要な示唆となった。活動中に、あたり前に起こってくる学生の葛藤や不安については、教員としてこれらに気づき、丁寧な対話やフィードバックが求められると省みることができ、今後の学習支援の参考となった。

以上のことから、現場体験型学習を通して得られた学びは、学生が地域で活躍するソーシャルワーク専門職として成長するための基盤の形成（レディネスの育成）につながっていた。学生が語ったアイデアや気づきそのものが主体的学びであり、人間的成長が図られたと捉えることができる。このことは、卒業後の精神保健福祉士・社会福祉士としての実践に活かされるものであると期待できる。

2. 現場との協働による活動・学習支援の意義と体制づくり

学生のさまざまな語りから、現場体験型学習の教育効果を支えていたのが、現場のスタッフによる活動支援と教員による学習支援の連携・協働であったことが明らかになった。現場のスタッフは、学生をあたたかく受け入れ、活動中の指導や助言、見守りを通して、学生が安心して参加できる学習環境を整えていた。また、教員は、学生の体験を学習成果へと結びつけるためのスーパービジョンを通して、体験の意味づけやふり返り、そして省察へと結びつけることを促していた。

このように、実践現場と教育機関がそれぞれの役割を連携・協働しながら担うことで、学生の学びは循環し、深化していた。これは、ソーシャルワーク教育における実践知の形成や、コルブ(Kolb,D.A.)による体験学習のプロセスモデルと通じるものであり、学習の循環を自然に促していたと意味づけられる。

一方で、教員と一緒に参加できなかった回に参加した学生からは、その機会があるとよかったとの声があがっており、学習支援を継続することの重要性が示唆された。既述の通り、学生の葛藤や不安に気づき、適切なフィードバックを行うことは、現場体験型学習における教員の重要な役割であるといえ、今後の教育プログラムの開発や教育実践において留意すべき点であるといえる。

3. ソーシャルワーク専門職養成における現場体験型学習の意義と取り組み課題

ソーシャルワーク専門職の養成・育成は、実践現場と教育機関の共通の課題である。現場体験型学習は、ソーシャルワーク専門職になるための重要な教育の機会であり、その意義を最大限に活かすためには、現場との協働による教育実践の振り返りや評価、検証が求められる。

認知症カフェは、学生が、認知症のある本人、家族、現場のスタッフ等関係者、地域住民と自然につながり、認知症の世界にふれ、他人事ではなく自分事として捉えることができるようになる場である。そこでさまざまな体験によって、ソーシャルワーク専門職に必要な生活者の視点を理解し、市民感覚を涵養することにつながる。こうした地域に根ざした教育の機会を、実践現場と教育機関が連携・協働しながら継続的に提供し、「今、ここで」の活動・学習支援を行うことで、地域人材の養成・育成を目指していくことが求められると考える。

VII. 結論—結びにあたって—

本研究では、認知症カフェにおける現場体験型学習を経験した学生の語りを分析し、その教育効

果を明らかにすることを試みた。学生の学外活動への参加は、多面的な学びを生み出し、ソーシャルワーク専門職になるための基盤の形成を促進していた。また、現場のスタッフと教員が連携して学生を支える協働的な支援体制が、学びの循環と深化を支持し、促進していたことも確認された。

これらの知見から、地域に根ざした教育の機会を継続的に提供し、実践現場と教育機関が連携・協働しながらソーシャルワーク専門職および地域人材の養成・育成に向けて、現場体験型学習がもたらす教育効果をより一層高めるための教育プログラムの開発が、取り組み課題となることが示唆された。学生が思考力や想像力、さらには創造力や行動する力を涵養する過程において、これらの力は現場体験型学習によって豊かに育まれていくことが明らかになった。

本研究を通して、本学部の精神保健福祉士・社会福祉士のソーシャルワーク専門職養成の教育実践をわずかながら振り返ることができた。教員としての教育力を高めていくためには、学生や現場のスタッフと三者で協働しながら取り組むことと同時に、認知症のある本人や家族、関係者、地域住民の協力も得て、一体となって学び合い、支え合うことのできる教育プログラムを開発していくことが重要になると考える。

VIII. おわりに—今後の課題—

本研究で明らかになった教育効果をさらに高めていくためには、いくつかの課題が残されている。まず、学生が初回参加時に抱える不安を軽減するため、活動に必要な最小限の本人、家族に関する情報提供について検討する必要がある。次に、活動後の振り返りを深めるために、現場のスタッフとかかわる時間を確保し、体験から学習へとつなげる支援を強化することが求められる。3点目は、継続参加を阻む物理的・経済的要因（交通費、移動手段や移動時間、学業との調整等）への支援について検討し、学外活動を持続可能な形で位置づける必要がある。さらに、現場のスタッフと教員が連携・協働し、活動・学習支援の充実を図るこ

とで、現場体験型学習の教育効果をより一層高めることができると考える。引き続き、学生の意見や考えを反映し、教育内容や方法の改善に努めたい。

本研究では、学外活動の一つである認知症カフェに焦点をあてたが、本学部精神保健福祉コースが推奨しているその他の学外活動、例えば、高次脳機能障がいのある人のリハビリの会や障害福祉サービス事業所での学外活動においても同様の教育効果がもたらされるか否かを検証することが課題である。今後も教育の質を高めるための体系的な研究が求められると考える。

謝辞

本研究にご協力をいただいた2023（令和5）年度精神保健福祉士養成課程卒業生6名のみなさま、ならびに認知症の人と家族の会山口県支部の正司明美事務局長をはじめ、川井元晴代表世話人およびスタッフのみなさまに、深く感謝申し上げます。

本研究は、2023（令和5）年度、2024（令和6）年度の2年間にわたって、山口県立大学研究創作活動助成（「教育改革型」）を受けて実施した。初年度の成果物として、2025（令和7）年3月に「令和5年度・令和6年度 山口県立大学研究創作活動助成 ソーシャルワーク専門職養成における現場との協働による教育効果の検証—地域人材の養成・育成に向けて—報告書」を作成した。

参考文献

- 藤田久美編・著(2025)『改訂版 未来につながるボランティア 高校生・大学生のためのボランティアハンドブック』ふくろう出版。
- 高良麻子(2025)「新・社会福祉士養成カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習教育の実態と今後の対応」『ソーシャルワーク研究』Vol.3 No.4通巻第12号,中央法規出版。
- 空閑浩人(2025)「リベラルアーツの視点を取り込むソーシャルワーク教育—実践を理論につなぐ内省的視座を育むために—」『ソーシャル

ワーク実践研究』第22号,ソーシャルワーク研究所。

草平武志・内田充範・宮崎まさ江・勝井陽子・角田憲治・永瀬開(2021)「地域共生社会の実現に貢献する福祉専門職養成のための新たな演習プログラムの構築」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第14号。

中村和彦(2017)「ソーシャルワーク実践理論再構成への素描—『構造—批判モデル』の導入と養成教育における具体的展開を構想して—」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』第54号。

三輪健二(2023)『わかりやすい省察的实践—実践・学び・研究をつなぐために』医学書院。

宮崎まさ江(2019)「こころの健康が大切にされる地域づくりをめざして—精神保健福祉士の活躍の可能性—」『やまぐちの自治』Vol.126。

宮崎まさ江・内田充範・横山正博(2018)「行政保健福祉職の実践に基づいたスーパーバイズ研修の効果測定に関する研究—A市高度保健福祉専門職能力育成研修会の分析から—」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第24号。

高木健志・宮崎まさ江(2014)「山口県立大学社会福祉学部における地域を基盤とした精神保健福祉士養成への取り組みに関する一考察—実習教育のさらなる充実に向けて—」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第20号。

鶴岡浩樹(2025)「不透明な時代にこそ、省察的实践家の育成を」『月刊福祉』

[資料1]

「ソーシャルワーク専門職養成における現場との協働による教育効果の検証—地域人材の養成・育成に向けて—」グループインタビューガイド

I. 導入；実施前のガイダンス

- ①本研究および調査の目的、内容の説明と参加同意の確認
 - ※「同意説明文書」「研究参加同意書」
 - ※記録（録音）の承諾を得る
- ②調査（グループインタビュー）進め方の説明と実施ルールの確認
- ③研究者等、研究協力者の自己紹介

II. グループインタビューの実施

- ①どのような目的や思いをもって、本活動に参加しようと思いましたか。
- ②実際に参加した活動内容、時期、頻度等について教えてください。
- ③本活動前・後の教員による学習支援（活動記録による申し送り、事前学習・準備に関する助言、活動後の振り返り等）は、いかがでしたか。
- ④活動当日の現場スタッフの方々による活動支援（事前ミーティング、事後の振り返り等への同席）は、いかがでしたか。
- ⑤本活動への参加において、戸惑ったり、困ったり、大変だったことなどを教えてください。
- ⑥本活動への参加が、自己の日頃の学生生活や将来の進路選択への影響があれば教えてください。
- ⑦本活動を通して、自己の変化や成長への気づき、得た学びや身についた力があれば教えてください。
- ⑧本活動をはじめとする「体験型学習」に対する考えや意見を教えてください。

III. 終了

- ①まとめ・振り返り
 - ・研究協力者による感想発表、研究者等によるフィードバックコメント
- ②研究参加の同意の撤回、本研究に関する今後の連絡先・方法等についての確認・説明

Examining the Educational Effects of Collaboration with Practice Settings in the Training of Professional Social Workers: Toward the Development of Community Human Resources

MIYAZAKI Masae
UCHIDA Mitsunori

This study aims to examine the educational effects of collaborative field-based learning in the professional training of social workers. Since 2017, the authors have participated with students in community-based activities, including a dementia café organized by the Yamaguchi Prefecture branch of the Alzheimer's Association Japan, and have explored the educational significance of experiential learning in real-world settings. With the implementation of a new curriculum in 2021 and the launch of the Mental Health Social Work Course in the Faculty of Social Welfare in 2022, the need arose to review and analyze these ongoing initiatives. Accordingly, group interviews were conducted with students who had participated in the dementia café, with the cooperation of the host organization. The analysis revealed that students learned, through direct interaction with people with dementia, their families, staff, and local residents, the attitudes and understandings required of social work professionals. Furthermore, observing and engaging with on-site staff functioned as a form of live supervision, deepening their learning. These findings suggest that field-based experiential learning is effective in cultivating human resources capable of fulfilling social roles within the community. Strengthening collaborative learning support systems between universities and practice settings will be essential for future educational development.

Keywords :

practice-based learning, dementia café , reflection, live supervision, training and development of professional social workers and community human resources